

淨瑠璃に於ける『娘道成寺』

秋 葉 芳 美

普通一般の観客は、現行の「京鹿子娘道成寺」の演出を、初演その儘の如く考へてゐられるやうであるが、それは初演の「京鹿子」を知らぬので、無理からぬことである。しかし舞踊家や舞踊研究者も、それを深く究めてゐる人は極く少數であり、現行の演出を以て満足してゐるかに見られる。もし六代目尾上菊五郎は現代舞踊の最高名手であるにしても、現行の演出を以て完璧無比として満足すべきであらうか。私は初演や初代中村富十郎の錦繪・正本・臺帳等を見て今日のそれを思ふ時に、現行の「京鹿子」は名優の集大的演出とはいひ難、決して正系のよき集大成ではない。現行の「京鹿子」の中には惡趣味の改修増補と、誤まれた改竄が尠くないのである。日本舞踊の代表的名品としておくにはもつと正しい演出に還元すべきではないかと思ふ。改むべき一々の型や衣裳・舞臺裝置等については既に「梨園」などにも書いたし、改めてこゝに書くべき紙幅もないので省略するが、ほんの二三の例をあぐるならば、レヴューまがひの背景やきいたか坊主

の住吉風の傘踊などは改訂すべきであり、「鐘供養」の札はあつても「女人禁制」の札はないし、住僧もなく、肝腎な問答もホンの申譯的のチョツピリで、白拍子の衣裳の流水に櫻花が枝垂櫻になつてゐて舞臺裝置のそれと重複してゐるなど現行のそれでよいものであらうか。初演の如き石橋やつしの鐘人はともかく、どの時代、誰れの演出を標本として保存すべきかはこゝには述べないが、少くとも九代市川團十郎以前まで遡つて改めることだけはいつておきたい。さうして人形淨瑠璃でも「勸進帳」上演に因んで、「京鹿子娘道成寺」の復活上演を望みたい。殊に來春には坂東鶴之助が四代中村富十郎襲名披露に「京鹿子」を演ずると聞く。もし私の望みが可能となつて人形淨瑠璃で演ずるのならば、いまだに古い型が残つてゐるやに聞く、その型を活して前述した如く現行の舞踊（京鹿子）をその儘お手下本としないこと。現在の文樂座に二代目吉川文五郎や初代吉田辰五郎のやつた「京鹿子」のものが遺存してゐようとは思はないが、名人豊澤團平作曲、

三代吉田辰五郎の「京鹿子」のものがそのまま残つてゐるかどうか。人形淨瑠璃でも屢々上演されたことを知つてゐられる人も少ないであらうから参考までに主なる興行を、私蔵の番附に依つて記しておこう。尤も文樂座上演を望むことゝ、ざつとした興行については「日本舞踊」(通卷第六十一號)十月號の「京鹿子娘道成寺の長唄正本について」の題下にも記したので、重複のところもあるが、再びそれ等も併せて記さう。

東京音楽學校(黒木勘藏)編の「近世樂年表」(義太夫節之部)に據ると、「京鹿子」名題で初めて繰りで上演されたのは、文化七年八月(十六日初日)大阪大西芝居(座本豊竹生駒太夫・太夫豊竹簾太夫)の「三日太平記」(大序より九段目迄)・「花上野譽の石碛」(志渡寺の段)・「大塔の宮囃鑑」(三段目)の大切に、白拍子を吉田辰藏の出遣ひで行はれたことになつてゐる。併し私の調べたところによると、天明三年二月(一日初日)大阪道頓堀東の芝居(座本近松門左衛門・太夫竹本氏太夫)が最も古く、「和田合戦女舞鶴」(初段・二段目・三段目)・「關取二代鑑」(屋敷の段・秋津島内の段)大切に、二代吉田文三郎の人形出遣ひで演じ、淨瑠璃・三味線は次のやうな顔觸れであつた。但し「二代鑑」の次に「萬歳」があり、淨瑠璃を竹本咲太夫・同重太夫、人形は(太夫)吉田千四・(才藏)吉田虎藏が勤めてゐる。

淨瑠璃	竹本重太夫	竹本菊太夫	三	鶴澤甚藏
	竹本咲太夫	竹本文字太夫		鶴澤重三郎
	竹本富太夫	竹本綱太夫	味	鶴澤寛三
	竹本氏太夫		線	大西東藏

私蔵の番附の書入れに「中村富十郎の娘道成寺の凡をうつして大出来」とあれば、繰りで「娘道成寺」を演じた最古であるらしい。これで見ても富十郎の「娘道成寺」が如何に持囃されたかが窺はれる。富十郎は天明三年二月京都四條北側西芝居(座本中山來助)の「桿枕龍頭灘」大切に「亂拍子花の振袖」の名題で娘道成寺を演じてゐる。狂言は「九州釣鐘岬」である。天明三年の淨瑠璃番附は現豊竹古靱太夫師も帖仕立の中に所藏してゐられたかに思ふ。二代文三郎は天明五年京都でも、伊勢中の地藏芝居でも演じてゐるが、大阪では寛政元年九月(朝日初日)北堀江西の芝居(座本竹本萬作)の「けいせい反魂香」(松の段から大門口の段まで)・「義經千本櫻」(三段目)の大切に「娘道成寺」を、やはり出遣ひで出してゐる。この時は「節事」を記し、淨瑠璃は竹本内匠太夫・同明太夫・同君太夫で、三絃は竹澤鶴佐和鶴澤文二等であつた。

二代文三郎は父たる初代文三郎に劣らぬ名人であり、殊に景事にも妙を示したので、いつも高評を博したのであらうが、當時所演の繪畫を見てゐないので、富十郎のそれとの比較も

獨創も判らず、殊に問答の條など知るよしもない。併し富士郎のそれを人形淨瑠璃式に演出したものであつたことは前述の書入れによつて大體想像され得るのである。二代文三郎歿後は、高弟の吉田辰五郎（文化二年歿）が勤めたといふが、まだその番附を見ない。その後これを最も得意としたのは、初代辰五郎の子二代辰五郎（前名辰造・天保十五年歿）で、文化七年八月大西芝居で演じたことは初めに記したが、同年十月（朔日初日）會根崎新地芝居（座本豊竹絹太夫・太夫豊竹麓太夫）でも「三日太平記」（小田別館の段から嘉平治住家の段まで）、「大塔宮囃鏡」（三段目の大切に出し、人形遣ひの配役は白拍子の吉田辰造（辰五郎）・阿佛坊の吉田普五郎・陀佛坊の吉田千四・住職の吉田冠三であつた。次は文化十四年三月（二日初日）大阪稻荷境内芝居（太夫本豊竹喜代太夫・太夫豊竹麓太夫）で、「祇園祭禮信仰記」（發端から鼠の段まで）の大切に、父辰五郎十三回忌追善として（この時辰造改め辰五郎となる）勤めた。文政六年九月京都四條北側芝居（名早雲長太夫代龜谷余之丞）の「本朝廿四孝」（大序より四の切まで）、「勢州阿漕浦一阿漕浦の段・平治住家の段」の大切に演じた時は「容艶花娘道成寺」と名題を据ゑた。この名題は三代瀬川菊之丞が文化元年正月大阪角の芝居で演じた時が初めて、同年十二月北堀江市の側芝居で二代澤村田之助も同名題であつたから之等によつたものであるが、これは「百千鳥娘道成

寺」も取入れられてゐる。但し人形淨瑠璃の方は「京鹿子」と殆んど同じであらうと思はれる。淨瑠璃は竹本むら太夫の白拍子・同鐘太夫の陀佛坊・同式太夫の阿佛坊・人形は吉田辰五郎の白拍子・吉田悦治の阿佛坊・吉田金四の陀佛坊・吉田朝右衛門の和尚（住僧）であつた。竹本むら太夫が文化十年三月（四日初日）備中宮内芝居（座本吉田三吾）で白拍子を勤めた時は「（笑からは龍頭、へといけ山樓）京鹿子娘道成寺」の名題で、富士郎の初演の句を冠した。淨瑠璃は豊竹入太夫の阿佛坊・同森太夫の陀佛坊・竹本出羽太夫の和尚・同美和太夫・豊竹多賀太夫の弟子坊主、三味線は豊澤仙左衛門・同龜吉・同源吉が勤めた。また吉田辰五郎（二代）は文化五年五月（七月初日）中之地藏芝居で勤めた時の名題は「戀鹿子娘道成寺」となつてをり、道行の淨瑠璃は竹本鐘太夫・同千賀太夫・豊竹百合太夫・三味線は鶴澤三二・同熊次郎・道成寺の淨瑠璃は竹本染太夫・同重太夫・同種太夫、三味線は鶴澤彌七・竹澤宗六・鶴澤力三郎、人形は吉田辰造（のち二代辰五郎）の白拍子・豊松伊十郎の陀佛坊・同彌三郎の阿佛坊・吉田清二の住僧といふ配役であつた。文政十年同じく中之地藏芝居で二代辰五郎が演じた時は「京鹿子娘道成寺」としてゐる。

長唄との掛合で演じた最初は詳かでないが、天保四年四月名古屋橋町芝居（名代伊勢屋孫三郎・太夫竹本重太夫）の「義經千本櫻」（大序より三段目迄）、「義經腰越狀」（三段目）大

切に「京鹿子娘道成寺」の名題で二代吉田才治が白拍子を勤めた時は左のやうな配役で長唄との掛合であつた。

淨 豊竹岡太夫 三 鶴澤 才治 白拍子 吉田 才治
 瑠 竹本琴太夫 味 鶴澤龜太郎 阿佛坊 吉田 三吾
 璃 竹本理太夫 線 鶴澤 文吾 陀佛坊 吉田 九藏
 長 岡安錢三郎 藤間 金七 笛 中村由五郎
 芳村常三郎 杵屋榮次郎 小鼓 小川 徳清
 芳村市五郎 杵屋兼三郎 大鼓 西川 鶴路
 唄 岡安 直吉 絃 藤間 政吉 大鼓 古川竹三郎
 芳村三之助 杵屋十代吉 同 西川 次平
 二代辰五郎も天保八年十二月(二十七日初日)大阪稻荷社
 内芝居(名代榊屋五兵衛・太夫本豊竹木々太夫・太夫竹本重
 太夫)で、「王藻前嘆袂」(十一冊)の次に「日高川人相花王」
 の四段目清姫嫉妬の段を据ゑ、大切に「咲からは龜頭京鹿子娘
 道成寺」を出したときは長唄との掛合で、義太夫・人形の配
 役、長唄連中等は次の如くである。

白拍子 竹本重太夫 吉田辰五郎
 阿佛坊 竹本越太夫 吉田 金四
 陀佛坊 豊竹島太夫 桐竹 門藏
 住 僧 竹本三根太夫 吉田 勝造
 文珠坊 桐竹門 十郎 豊咲坊 豊松 吟造
 参(清姫) 竹本頼母太夫 吉田 辰造(二代辰五)
 考(嫉妬) 竹本勢見太夫 吉田 辰造(郎の子)

長唄 潮出名雄吉 笛 田中 吉藏 三味線
 中村 兵藏 小鼓 石田幸次郎 豊澤仙左衛門
 岩崎 力藏 大鼓 小川三五郎 鶴澤勝右衛門
 三 中村新三郎 太鼓 石田富三郎 鶴澤 才治
 絃 中村 新佑 同 田中 榮藏
 花房龜次郎

この時、「京鹿子」の前に清姫嫉妬之段を置いたのは作者山
 田案山子などの案でもあらうか。とにかく従來の「京鹿子」
 に添削がなされたものであつて、頗る評判がよく、正月中大
 入續きであつたといふ、これを粉本として文久元年八月大阪
 稻荷社内東芝居(太夫竹本長登太夫)で「八陣守護城」(大序
 よりハツリ迄)の切に「日高川人相花王」(庄司屋鋪之段)を
 置き、大切に長唄掛合の「道成寺」を演じた。その時の配役
 ・連名を示さう。

白拍子 竹本むら太夫 (二役清姫) 吉田 玉造
 阿佛坊 竹本多満太夫 吉田 文三
 陀佛坊 竹本長枝太夫 吉田新五郎
 住 僧 吉田 小玉 三味線 豊澤 廣助等
 中村 成吉 笛 島村幸十郎
 長唄 岩崎七兵衛 小鼓 小川三五郎
 岩崎 喜市 大鼓 小川紀之介

三味線 杵屋佐之助
 中村 小成 太鼓 小川 駒吉
 杵屋伊之助 小川 長次郎
 小川 淺吉

安政三年正月道頓堀若太夫芝居（座本豊松重太郎）の「鍾倉三代記」（大序より八つ目迄）・「傾城阿波の鳴門」（十郎兵衛の段）・「蘆樹累物語」（土橋の段大切に、「京鹿子」を出した時の淨瑠璃は竹本春太夫の白拍子・同是太夫のツレ・豊竹八十太夫の陀佛坊・同時太夫の阿佛坊、三味線鶴澤友治郎等が勤めた

近く明治十八年二月（一日初日）大阪稻荷北門彦六座（太夫竹本住太夫・三味線豊澤團平・人形吉田才治）の「妹背山婦女庭訓」（大序より四段目迄）・「けいせい阿波鳴門」（八ッ目）切に「京鹿子」を演じた時は左の如くであつた。

白拍子——竹本松島太夫——吉田辰五郎

ツレ——竹本越太夫・竹本生島太夫

阿佛坊——竹本大隅太夫——吉田 才治

陀佛坊——豊竹富司太夫——吉田 三吾

三味線豊澤團平・豊澤新左衛門等

長唄——玉村巳午造——三絃——小川 淺丸

以上は遺漏のない興行表ではなく、私藏の番附を主として記したので、脱漏は江湖博雅の珍襲のものによつて増補して下さらば幸甚である。歌舞伎の「京鹿子」又は道成寺物の興

行年表は拙編「歌舞伎に於ける道成寺物」（元祿—明治）を参照せられたく、初演（京鹿子）の道成寺問答の正本は私藏のものにより「三味線樂」（第五卷第六號）・「日本舞踊」（通卷第五十八號）に掲載・また「京鹿子」初演の番附、或は富十郎の錦繪などは守隨氏との共編「歌舞伎圖説」について見られたく、道行の歌詞や道成寺正本の變遷については「日本舞踊」通卷第六十號・第六十一號の拙稿を見ていただきたい。たゞ參考までに「京鹿子」（初演）の道行と「九州釣鐘岬」の道行は、いづれも義太夫なので、その連名を記しておく。

實曆三年三月（二十六月初日）江戸中村座での初演道行の淨瑠璃は上の巻が豊竹折太夫・下の巻が竹本伊豫太夫で、三味線は上下とも竹澤東五郎であつた。また實曆九年十二月廿二日（初日）大阪角の芝居（座本中山文七）での「釣鐘岬」の道行「ちぐさ結び」の淨瑠璃は豊竹林太夫・ワキ同難波太夫三味線鶴澤伊三郎であり、爾來京阪での「京鹿子」道行は殆ど義太夫節に限られてゐた。

×

×

×

×

×

×